

松本清張記念館

◆館報◆
2003.3
第12号

わが力なきをあきらめしがされど 草の葉で織る焰文様

(ほむら)

平成3年8月 初版
文藝春秋刊

作品紹介

短編の「つ「老公」は最後の元老・西園寺公望公爵の晩年を描く。
(わたし)は、西園寺が晩年隠棲していた坐漁荘の警備日誌「西園寺公爵警備沿革史」を手に入れる。かつて坐漁荘の運転手が突然罷免された件の真相を探るために、運転手罷免の影に秘められていた別の事件に気づく。

昭和初期、次第に軍国色が強まるにつれ、元老は必要とされなくなり、西園寺が政治の表舞台にたつことも少なくなる。(わたし)は坐漁荘の二階から、ひとり興津の海を眺める老いた西園寺の孤独な背中を想う。

単行本には、ほかに六つの短編を収める。モーツアルトを見いだしたものの歴史に名を残さなかつた「伯楽」を追う「モーツアルトの伯楽」、西ドイツで考古学を修める日本人留学生を描いた「ネッカ川の影」、眠れぬ夜、想いをめぐらせる男の物語「夜が怖い」など、それぞれの人生を歩んできた人物の晩景を、さまざまな筆致で描き出す。

長編小説を多く遺した清張だが、短編を書くことには生涯こだわり続けた。清張は、最後の短編集となつたこの本に上記のエピグラフを記した。

目次

- 没後10年記念・清張忌俳句大会 2
- 講演と対談 松本清張の旅 4
- みんなの広場 6
- 友の会活動報告 6
- 探検! 清張記念館 5
- 企画展紹介「松本清張の旅」 7
- 新企画 清張原風景「点描」 7
- 研究誌「松本清張研究」発行 8
- トピックス 8

現在入手できる本
『草の径』文春文庫(文藝春秋)
『草の徑』文春文庫(文藝春秋)

「文藝春秋」平成2年1月から翌年2月まで連載された短編連作集。「削除の復元」・「ネッカ川の影」・「死者の網膜犯人像」・「隠り人」・「日記抄」・「モーツアルトの伯楽」・「呪術の渦巻文様」・「老公」・「夜が怖い」からなる。単行本に「削除の復元」を除く七作品が収録された。

(学芸担当 小野 芳美)

松本清張没後10年記念

清張忌俳句大会

坪内稔典氏
記念講演

「松本清張と俳句」

平成十四年十一月十五日、小倉リーセントホテルにおいて清張忌俳句大会を開催しました。

大会当日は、投句と表彰式、坪内稔典先生の講演に百二十名の方が出席下さい、盛況でした。

大会に先がけて八月九月に募集した事前投句の受賞作と、当日投句の受賞作、坪内先生の講演内容を二部紹介します。

事前投句集

【特別賞】

清張忌俳句大会賞

点と線つなぐ歳月清張忌

松本清張記念館賞

清張忌三万冊の蔵書の威

【赤尾恵以選】特選

点と線つなぐ歳月清張忌

清張忌列車が母を小さくす

清張忌白い闇より櫂の音

【倉田紘文選】特選

頬杖のための文机清張忌

飛び石に従ふ小春日和かな
地下鉄へ百の階段清張忌

【野見山ひふみ選】特選

清張忌三万冊の蔵書の威

石組の棚田一望曼珠沙華
短篇は黒の印象清張忌



はじめに

俳句は私達の日常をちょっとこころめるための言葉です。五七五というのは小さな言葉の空間だけでも、実はそれは私達の日常とは離れたものだということがきっと大事なんじゃないでしょうか。



清張作品のなかの俳句

松本清張さんの小説には、いくつか俳人を扱った小説があります。例えば「菊枕」、「これは杉田久女がモチルです。それはあくまでもモチルであって、杉田久女そのものではありません。だから「ぬい女」という名前ででてきます。とてもひたむきな人を描いています。また橋本多佳子がモチルになっている「月光」という小説もそこに登場する俳人たちがとてもひたむきです。度をこえてひたむきといつたほうがいいかもしれません。「巻頭句の女」にも共通しています。清張さんは、ひたむきさにある意味で共感して描いているんだと思うんです。

さてもうひとつ、「時間の習俗」という小説は、俳人が犯罪を犯す話です。そのポイントというか、番大事なことは、地元のお祭り「和布刈神事」ですね。この小説の内容にあるように、俳句の会というものは俳句をやっている人が殺されたことがあります。俳句をやっているという若い人が尋ねてきて、おうちにあげたりして親しくして、いたら殺されちゃったんです。新聞に載ってニュースになりました。そういうと「え、どうも俳句にはあります。『巻頭句の女』でも、同じ雑誌に名前がでていたというので、訪ねていったりします。「月光」でも三鬼みたいな人が多佳子みたいな人のうちに四五泊まりこんだりします。そういうふうに俳句はそれをやっているだけで、この世界になるところがあります。それはきっと俳句の伝統だと思ふんですね。江戸時代などは例えは俳号があつて俳号で集まつてみると俳諧自由とかいつてみんな仲間になりました。特に江戸時代は身分制の社会だから俳号をつけないと、現実の身分をひきずつてしまふと付き合いにくいんです。たとえば芭蕉の仲間たち

久米英子（山口県下関市）
石原フサ（福岡県北九州市）
川口チヅ子（山口県下関市）
山本よし子（山口県下関市）
久米英子（山口県下関市）
石原フサ（福岡県北九州市）
川口チヅ子（山口県下関市）
市丸志郎（福岡県北九州市）
柴野ばづき（東京都目黒区）
大森照子（福岡県北九州市）
山本よし子（山口県下関市）
竹内美和子（山口県萩市）
富永壽一（福岡県北九州市）

ですが「月光」と題が変わっています。「」の小説には俳句がたくさんできます。三鬼がモデルと思われる不景と、いう登場人物の出世作として「水まくら氷湖どこかで鱗を入れる」ができます。元の作品がとても有名ですから、みんな「水枕がぱりと寒い海がある」というのを思い浮かべてしまいますね。また橋本多佳子の句で「芥子ひらく髪の先までさびしき時」というのがあります。これが「髪の先まほりふれて花卉漬す」というふうに変えられています。清張さんの俳句は俳句用語でいと言います。ただの「月光」という小説は、どうしようもない男がきれいな女流俳人になんとかして近づこうとしてせまる。そのひたむきさがきっとといいんだと思います。俳句のようあまり役に立たないといつたら語弊がありますけど、さほどそれで金儲けができるたり、社会的に地位が高まつたりするわけじゃない、まさに遊びに近いものです。そこに純粋さがあります。そのひたむきさに対する共感が、「月光」という小説を支えているんだと思います。

さてもうひとつ、「時間の習俗」という小説は、俳人が犯罪を犯す話です。そのポイントというか、番大事なことは、地元のお祭り「和布刈神事」ですね。この小説の内容にあるように、俳句の会というものは俳句をやっていることがあります。それが殺されたことがあります。かつて柴田白葉女といふ俳人が殺されたことがあります。俳句をやっているといふ若い人が尋ねてきて、おうちにあげたりして親しくして、いたら殺されちゃったんです。新聞に載ってニュースになりました。そういうと「え、どうも俳句にはあります。『巻頭句の女』でも、同じ雑誌に名前がでていたというので、訪ねていったりします。「月光」でも三鬼みたいな人が多佳子みたいな人のうちに四五泊まりこんだりします。そういうふうに俳句はそれをやっているだけで、この世界になるところがあります。それはきっと俳句の伝統だと思ふんですね。江戸時代などは例えは俳号があつて俳号で集まつてみると俳諧自由とかいつてみんな仲間になりました。特に江戸時代は身分制の社会だから俳号をつけないと、現実の身分をひきずつてしまふと付き合いにくいんです。たとえば芭蕉の仲間たち

【林 加寸美選】特選

吾が稿に夜の蟻這ふ清張忌
清張忌セピアインクの壺涼し
清張忌今は静かに太きベン

【松本 圭一選】特選

点と線つなぐ歳月清張忌

秋思なほ明日香の石に謎かけて

石榴の実百周年の小学校

【横山 房子選】特選

原色の表紙華やぐ清張忌

清張忌書斎に主坐すごとし

斜面台に万の軌跡や清張忌

当日投句集

【特別賞】

松本清張記念館賞

逆光の芒かがやくけもの道

【倉田 紘文選】特選

北風の道清張の背中行く

落葉踏む清張館へつづく道
最果ての岬への道冬ざるる
逆光の芒かがやくけもの道

【松本 圭一選】特選

おちこちの道掘られおり七五三
冬うらら清張館への径ひとり

師の句碑へどの徑行かん石路明り

古賀 伸治	(福岡県福岡市)
増原 純子	(山口県下関市)
松田 宏子	(福岡県北九州市)
久米 英子	(山口県下関市)
松浦 札子	(奈良県奈良市)
堂本ヒロ子	(福岡県北九州市)
濱福 郁子	(山口県下関市)
原田 初子	(福岡県福岡市)
秋武 久仁	(福岡県北九州市)

感動の発見

五七五で自分の暮らしや想いをそのまま表現するの
はとても難しいです。何しろ言葉が短いし、言葉の形ま
で決まっていますので。僕はよく言うんですけども、僕ら
が俳句を作る時にはだいたいこの大きな方向があります。
一つは自分の中に感動があつてその感動を表現したい
といふ、感動が先にある場合ですね。もう一つはない場合。
近代の社会は個人の心の中の一番大事なものが感動だと
考えてきて、それを表現するのが文学だと考えてきたん
です。俳句の場合もその歴史は百年くらいしかない。そ
の前は全然違つて思います。正岡子規なんか違います。
感動が先にないんです。まず正岡子規の家で句会をする
といふ、十人くらいみんな集まつてきますね。線香を三
本立てるんです。それで線香が燃えるまでに菊という題
ができるだけたくさん作る、或いは菊という題で最低
十句つくれとかいうんですね。或いは袋回しといふ作り
方がありますね。人数分だけ題をだして回していく作
る。そういうのをするんです。だからはじめから何か感
動したことを表現するわけではないです。でも切羽詰
つ時間に追われて一生懸命作る。そしたら表現したい
ものが逆に意識しないで自分の心の中が表現されてしま
ます。「鷄頭の十四五本もありぬ」などていう子規の
有名な句がありますが、これもそんなどつにして「鷄頭」
という題で作られた俳句で、作ったときはきっとあまり

だと、家老がいたり、大商店の大番頭がいたり、いろいろ
評したりいろいろ言つてくれて、だんだんその句が成長し
ていて、あそそか、これいいなあと作者が思いだしてい
く。僕はそういう作り方で、作る「とにより感動を発見
する」というふうに言つているんです。感動を表現する作
り方と、作ることで感動を発見するという作り方があつ
て、作ることで感動を発見するという作り方のほうが、
もしかしたら俳句にはあつてゐるかも知れない。僕は
思うんです。考えてみましたら、写生もそつなんですね。
出かけていて、川見たり、堀見たり、木の葉見たりして
見たことをそのまま書きとめると出来上がった作品を通じて自分はこういうことに感動したんだ
なということに気づく。そういうふうにこれからは僕は
ゆつりと作ることを通して感動を発見するというふ
うに俳句が大きく変わっていくのかなと思っています。そ
のほうがきっと俳句が楽しくなる気がします。気楽にな
るんですね。だけど今話した作り方だとどうしても遊
びの要素が強い気がするでしょ? 線香一本でやれとか袋
回しやれとか。その遊びの要素を感動派の人は嫌つた
んですよ。この百年間はね。だけどもう一度遊びの要素
みたいなものも大事だと考え直してもいいのではないか
など僕は思います。

私は言葉を通して見たり感じたり考え方たりして
います。言葉がなかつたら見るにも感じるのもでき
ないんですね。例えば日本語では虹というのは七色と決
まります。だから私は虹がでると虹だ、七色だと
思います。だけど世界の言語の中では五色だったり三色
だったりします。虹が三色だという国のそういう言葉で
育つた人は虹を見たときに三色しか見えない。言葉つ
てそういうものなんです。だから自分がよく使える言葉、
馴染んでいる言葉つて、このを持つておかないと、世の中
が、世界がよく見えない。そういう馴染んだ言葉をもつ
て、そして取り合せによって、今まで使つたことのない言
葉を使ってみる。そういうことで私達は俳句を通して意
外に自分自身を新しくしたり日常をちょっとこうえたり
することができるのではないかなと思っています。

※本稿は平成14年11月15日に行われた特別講演の内
容の一部を紹介したものです。

宮田穂栄 「旅の時間の清張さん」

宮田穂栄 ●エッセイスト、元中央公論社編集者

宮田氏は、入社後すぐに「黒い福音」の担当となつてから、清張の晩年まで何度も取材旅行に同行されています。仕事に妥協を許さなかつた清張は、取材先でも限られた時間の中できちんと仕事を消化する一方で、折をみては〈道草〉を楽しんでいたと語ります。その様子を「本当にのびのびとして少

年らしい清張さんだった」と回想し、「作家の過酷な生活を潤滑化するために、旅でエネルギーを蓄え、次の仕事をこなし、また次の楽しみの旅に出ていた」と、仕事をする清張と、旅を楽しむ清張の両面を知る編集者ならではの講演で聴衆を惹きつけました。

講演と対談

「松本清張の旅」—編集者としての関わりから

岡崎満義 「清張さんの真正面主義」

岡崎満義 ●ジャーナリスト、元文藝春秋編集者

清張がそれまでの対談の仕事で見せていた「真正面主義」を、昭和四十三年のキューバへの取材旅行の際にも発揮していた、というエピソードから岡崎氏の講演は始まりました。「変化球投手のように」さまざまなジャンルの作品を描いた清張も、対談や取材の折には「ぐいぐいでオーフードで押して

●平成十五年1月21日
●小倉リーセントホテル



対談



「松本清張研究」三号での対談では語られなかつたエピソードやハニーニングに、何度も会場は沸きました。井伏鱒二と将棋を指した折の想い出や愛読者を大切にしていた姿など、打ち合わせなしで行われた対談は旅以外の話題にも及びました。苦労もあった旅だったが、清張の人間的な魅力でうち消され、今は楽しかったことばかりが胸に残つてゐる、と締めくくられました。

岡崎氏・宮田氏、そして急遽藤井館長が飛び入りで参加し、三人でおこなわれた対談は、平成元年のヨーロッパ取材旅行を中心、編集者という立場から見た、作家・清張の印象が語られました。

円本

誰でもこれまで一度は、文学全集というものを手にとったことがあるのではないか。

松本清張も、青年時代に、文学全集の世界に羽を伸ばした。

「外国文学は新潮社から最初の世界文學全集が出たときに馴染んだ。ドストエフスキーも、その機縁で読むようになつたが、そのうち惹かれたのはボオであった。」のような好みの私が私小説に興味をもてるはずはない。原久一郎訳のゴーリキイの『夜の宿』(どん底)をよみ、その陰惨な生活が当時の自分にひどく親近感を持たせた憶えがある。」

「半生の記」より

誰でもこれまで一度は、文学全集といふものを手にとったことがあるのではないか。



しかし清張は、後年この「文学全集」に苦い思いをさせられた。『形影』に次のような文がある。

〈昭和二年の円本いい、日本文学全集は明治・大正・昭和の文学作品を網羅したのが何回となく各出版社から出されている。これにより三代にわたっての事蹟たる作品は湮滅することなく、多くの読者や評論家に読まれる機会を得た。しかし未だ曾てそれらの全集にようて埋もれていた作家が発掘され、高い評価を得たというためではない。〉

中央公論社から昭和三十九年に刊行された文学全集「日本の文学」から、自分の名前が落ちたことに対する清張の憤りは激しかった。「この件が純文学へさらなる不信と憎悪に駆り立てたに違いない。文学の隔たりなく読書を愛した少年時代の清張を思うと、少し切ない話である。

※参考図書
●『改造社の時代 戦前編』水島治男著(一九七六年・図書出版社 発行)
●『松本清張の仮想敵 全集「日本の文学」をめぐって』宮田穂菜著『松本清張研究』第二号(二〇〇〇年・北九州市立松本清張記念館発行)

(学芸担当 柳原 晓子)

きよしとハルコの探検! 清張記念館

1F 2F 再現家屋

「思索と創作の城」の巻



東京・杉並の家。丸印の部分を再現している。

きよし

館内に家が入っているって大胆な展示だよねえ。



手にかかる負担を減らすため、斜面台を利用していた。

ハルコ

本当。でも、清張の作家生活をそのまま見せるにはすごくいい方法かも。

きよし

仕事部屋なんて、清張のエネルギーがそのまま残っていて、ここで見るとそのうち清張が入ってきそうだ。

ハルコ

清張は執筆に、デザイナー時代から愛用していた斜面台を使っていたんですね。そこで数々の傑作が生まれたのね。

きよし

電話や資料が、手の届く所にごちゃっと置いてあって、良く言えば「創作の世界に乗り込むコックピット」みたいなんだけど、僕の机にも似てなくもない…。

ハルコ

失礼なことを言わないの! あなたのは散らかってるだけ。掃除手伝ってあげるから、もっときちんとして。

きよし

ハルコちゃん、ここまで僕のことを♥

ハルコ

勘違いしないで。私の貸した本があの部屋にあると思うと本がかわいそうで。

きよし

…ごめん。

書類の位置にいたるまで、生前の清張の自宅をそのままに再現した展示は圧巻。作家の時を切り取つて目の前に置かれたようです。隅々まで見逃せない「思索と創作の城」は、展示1「松本清張の世界」から渡り廊下でつながっています。

今回は、開館以降お寄せいただきましたアンケート8,232通（15年2月末現在）を集計しまして、「あなたの好きな清張作品」「あなたの好きな清張原作の映画」ランキングをお届けします（具体的な作品名でお答えいただいたものを対象としています）。

果たして皆さんのお気に入りの作品は何位に入っているでしょうか。まだお読みになったことのない作品も中にはあるかもしれません。是非一度チャレンジされてみてはいかがでしょうか。

みんなの広場

あなたの好きな清張作品(1,887票)

		票数	得票率
1位	点と線	518票	(27.5%)
2位	砂の器	371票	(19.7%)
3位	ゼロの焦点	111票	(5.9%)
4位	黒い画集 【内訳】黒い画集(42)・天城越え(18)・遭難(3)・坂道の家(3)・証言(1)	67票	(3.6%)
5位	或る「小倉日記」伝	66票	(3.5%)
6位	張込み	54票	(2.9%)
7位	日本の黒い霧 けものみち	50票	(2.7%)
9位	昭和史発掘	45票	(2.4%)
10位	波の塔	38票	(2.0%)
(以下票数のみ)			
11位	西郷札 球形の荒野	34票	
13位	火の路	32票	
14位	霧の旗	27票	
15位	半生の記 禁忌の連歌 【内訳】黒革の手帖(16)・渡された場面(4)・天才画の女(1)	21票	
17位	顔	20票	
18位	時間の習俗	19票	
19位	眼の壁	16票	
20位	わるいやつら	14票	
21位	黒い福音・西海道談綺	各13票	
23位	古代史疑・黒地の絵・砂漠の塩・鬼畜	各9票	
27位	無宿人別帳・十万分の一の偶然・黄色い風土	各8票	
30位	Dの複合・迷走地図・小説帝銀事件	各7票	

33位	天保図録・別冊黒い画集【内訳】陸行水行(6)各6票
35位	地方紙を買う女・神々の乱心・蒼い描点・菊枕・影の車【内訳】影の車(2)・突風(1)・鉢植を買う女(1)・万葉翡翠(1)各5票
40位	熱い絹・黒の回廊・文豪・ガラスの城
	黒の様式【内訳】黒の様式(2)・内海の輪(2) 各4票
45位	たづたづし・影の地帯・清張日記・かけろう絵図・父系の指・蒼ざめた礼服・草の陰刻・彩り河・高校殺人事件・北の詩人・深層海流・黒の線刻画【内訳】網(1)・渦(1)・馬を売る女(1) 各3票

あなたの好きな清張原作の映画(330票)

		票数	得票率
1位	砂の器	186票	(56.4%)
2位	点と線	35票	(10.6%)
3位	張込み	27票	(8.2%)
4位	天城越え	15票	(4.5%)
5位	霧の旗	14票	(4.2%)
6位	ゼロの焦点	13票	(3.9%)
7位	けものみち	9票	(2.7%)
8位	波の塔	7票	(2.1%)
9位	疑惑	4票	(1.2%)
	鬼畜	"	(")

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介しております。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いております。

友の会活動報告

●第2回 清張サロン(平成14年12月18日(水):参加者13名)

9月に初めて開催した清張サロンも今回が2回目となりました。テーマは「或る『小倉日記』伝」。冒頭に、NHK北九州放送局が制作した「名作をポケットに～或る『小倉日記』伝」を一同鑑賞し、その後、参加者が各自の感想・意見などを出し合いました。

地元小倉を題材にした馴染み深い作品とあって、参加者の関心も高く、始終活発な意見交換がなされました。

第3回は4月中旬に実施予定です。



●関東地区文学館見学会(2月15(土)・16(日):参加者20名)

年1回実施している他都市文学館見学会も今回が3回目となりました。

今回は関東地区を対象として、神奈川県横浜市にある神奈川近代文学館と大佛次郎記念館(写真)を訪問しました。

関東地区には友の会会員がたくさんいらっしゃいます。文学館訪問後には、関東在住の会員の方を交えて懇親会も行いました。(盛況でした)



会員募集中!

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

企

画展紹介「松本清張の旅」

企画展の開催期間を5月6日(火)まで

延長いたします。

皆様のお越しをお待ちしております。

■ 松本清張記念館 地下

企画展示室



■ 内容

1. 未知への憧れ

少年期からサラリーマン時代まで、作家になる以前の清張にとっての“旅”について紹介します。

2. 清張作品で旅する

清張作品は日本中・世界中を舞台としています。龜嵩や能登金剛、青木ヶ原の樹海など、清張作品に登場し、一躍有名になった土地もあります。多くの読者が清張作品で見知らぬ土地への旅へと誘われました。

3. 海外取材紀行

流行作家として多忙な生活を送る合間を縫って、清張は現地におもむき、できるかぎり自分で取材を行いました。その対象は国内のみならず、世界各地におよびました。いつでも「作家」でありつけた清張の一側面を紹介します。

4. 行動する作家

清張は社会的意義を持つ活動でも業績を残しています。様々な〈壁〉を突き破り、スケールの大きさで世間を驚かせました。作家の旅は、原稿用紙の上だけではなく、書斎の外でも結実をみせました。

5. こころの旅

少年時代から旅に憧れを持ちつづけた清張の長年の夢は、日本中の自分の作品の舞台を上空から眺める、というものでした。晩年、中江利忠氏(当時朝日新聞社社長)の協力で実現したとき、セスナ機内で青年のように喜んだそうです。カメラのファインダーを覗く清張の胸中には、どんな思いが去来していたのでしょうか。



関門橋 橋脚付近が下関・壇ノ浦、対岸は門司・和布刈

新シリーズ
第1回

清張原風景

点描
壇ノ浦

「次の私の記憶は、小倉から下関に移る。
今は下関から長府に至る間は電車が通

じているが、当時は海岸沿いに細い街道があ

るだけだった。現在火ノ山という山にケ
ーブルカーがついて展望台ができるが、
その場所が旧壇ノ浦といって平家滅亡の
旧蹟地になっている。そこに一群の家が六、
七軒街道に並んで建っていた。裏はすぐ海
になつてるので、家の裏の半分は石垣か
らはみ出て海に打った杭の上に載っていた。

私の家は下関から長府に向つて街道から
二軒目の一階屋だった。
松本清張が「半生の記」でたどった下関
時代の冒頭部分である。清張は生後間
もない明治四十三年から大正六年までの
間を下関で過ごしている。

下関と九州・門司を隔てる関門海峡は
「歴史を運ぶ水路」ともいわれ、多くの歴
史の舞台となつた。一一八五年、源平合戦
の最後の戦いで平家が敗れ去つたのは、壇
ノ浦沖の海戦であった。

私は下関に立
て、祖母の骨
を壇ノ浦に運
んでお墓を立て
た。壇ノ浦は、
私の心の故郷だ
。
（中野 吉明）



みもすそ川公園の文学碑

研究誌『松本清張研究』第四号発行

定価二〇〇〇円



年一回発行の「松本清張研究」は第一線の研究者を網羅し、つねに新鮮な特集を組んでいます。今回の特集は「清張ミステリーの現在」です。研究論文のほか、作家の森村誠一氏や文芸評論家の郷原宏氏による座談会や、現在活躍中の作家の皆さんからの「アンケートの回答」など内容も盛りだくさんです。

特集
ミステリー工房の秘密
卷頭

阿刀田
高

〈座談会〉「松本清張の時代に生きて」

森村 誠一、郷原 宏、山田 有策（司会）

風景の複合

川本
三郎

〈赤い鱗〉の群れる海——『蒼い描点』と『天才画の女』郷原宏
「悪」へと反転する「正義」

小笠原賢一

——『眼の壁』と『けものみち』を中心に

平岡
敏夫

明子はなぜ殺されたか——「表象詩人」論

山前
譲

古びることのない新しさ

松本
清張

再録・推理小説の文章

黒い画集をめぐって

「遭難」の内と外——『週刊朝日』と『黒い画集』

藤井
淑楨

中年男の六〇年前後——松本清張「坂道の家」を読む

大井田義彰

作家アンケート「松本清張 再発見のために」
「行者神髄」論——〈物書きの魔〉について

天沢退二郎

●編集後記

今年は、清張が芥川賞受賞を機に、小倉を離れ、上京してから五十年になります。

今回から新シリーズとして「清張原風景点描」と題し、清張の小倉時代を紹介します。

（中野 吉明）

松本清張記念館 入館者50万人

入館者50万人

平成十四年十一月十六日、開館以来五十万人目の入館者をお迎えしました。五十万人目の入館者は、熊本県菊池郡大津町から旅行で立ち寄った本山玲子さんで、藤井館長から認定証と記念品が贈られました。

本山さんは「ひっくりました。

これを機会にもうともと清張作品を読んでみたい」と感想を述べられました。

記念館では、入館者五十万人を記念して、オリジナルグッズの抽選会や講演会、映画上映などの記念事業を実施しました。



記念のくす玉を割る本山さん（左）と藤井館長

松本清張研究会 第7回 研究発表会

第七回研究発表会が十二月八日、京都の立命館大学で開催されました。東京以外では二回目の開催ですが、多数の一般参加もあり会場は満員でした。

国際日本文化研究センター教授の井上章一氏が「清張の歴史とアカデミック」という題目で講演され

た後、会員の渋谷香織氏（駒沢女子大学助教授）による「清張小説における恋愛観——「波の塔」をめぐって」の発表が行われました。



編集・発行

松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス



イラスト:山藤 章二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 年末（12月29日～12月31日）
- 観覧料 一般／500円（400円） 中・高生／300円（240円）
小学生／200円（160円）（ ）は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
バス：小倉北警察署前/NHK前下車
車：北九州都市高速、大手町ランプより5分

